



調査地における外堀の変遷模式図



古写真1 明治8（1875）年頃 西国橋東岸の町並み（高石市教育委員会蔵）

古写真2 第2次世界大戦前 西国橋から南望 福中橋と船場川東岸（兵庫県立歴史博物館所蔵 高橋秀吉コレクション）

古写真3 昭和35（1960）年 白鷺橋から南望 西国橋と船場川西岸の町並み（兵庫県立歴史博物館所蔵 高橋秀吉コレクション）

表紙 宣賀2（1749）年頃『姫路城下漫水被害図』部分（姫路市立城郭研究室所蔵）

## 姫路城城下町跡（第480次）発掘調査現地説明会資料

令和5年（2023年）7月22日

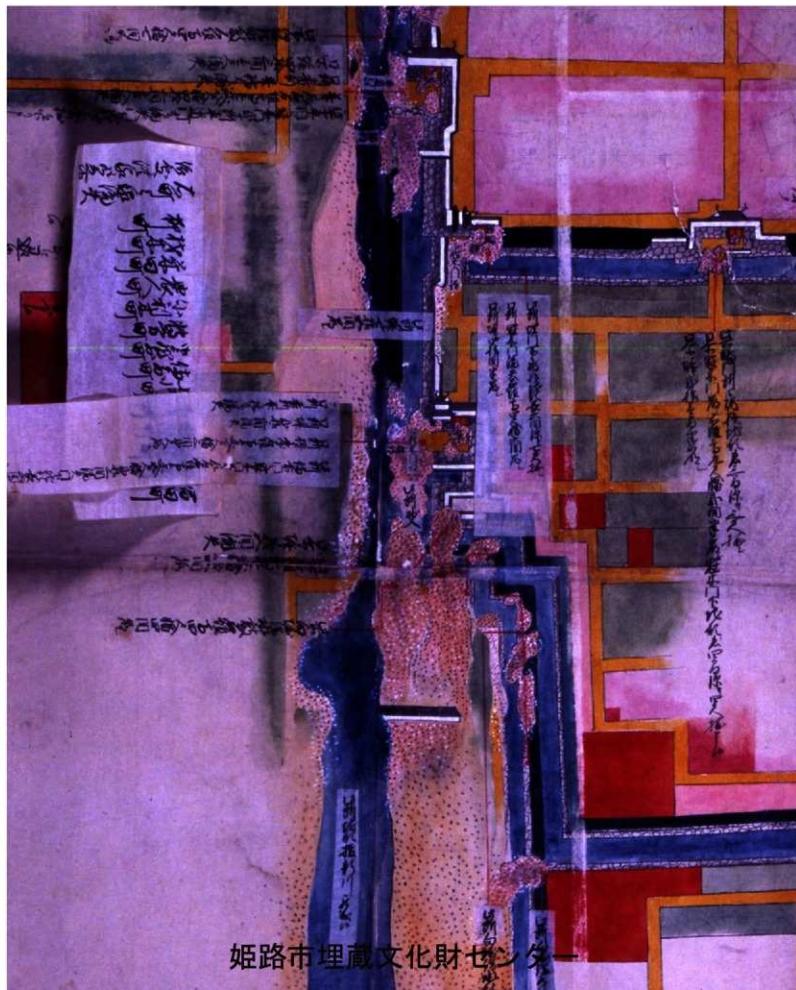
姫路市埋蔵文化財センター

〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地 TEL 079-252-3950

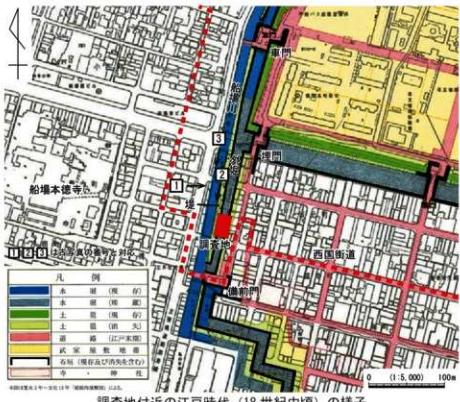
<http://www.city.himeji.lg.jp/maibun-center/>

## 姫路城城下町跡（第480次）発掘調査現地説明会資料

2023.7.22（土）10:30～



姫路市埋蔵文化財センター



調査地付近の江戸時代（18世紀中頃）の様子



調査区南部 全景（北東から）



調査区南部 外堀・堤と船場川（北東から）

## 江戸時代の調査地付近の様子

姫路城は、慶長5（1600）年に姫路に入った池田輝政によって、平野部と独立丘陵（姫山・鷺山）を利用して築かれた平山城です。内・中・外の三重の堀で曲輪を区画し、外堀は、城下町を含めた城全体を囲う総構えでした。

今回の調査地は、町人地を中心とした外曲輪の西部、姫路城の西を画する外堀にあたります。江戸時代の絵図等によれば西側を船場川、その東に石積みの土手を挟んで外堀が設けられ、堀沿いには土塁がありました。調査地のすぐ南には、西国街道の西の出入口である備前門があり、門には木橋が架かっていました。



調査区内 外堀横断面写真（南から）



調査区中央部 東面石垣（北東から）



調査区中央部 西面石垣（北西から）

## 調査でわかった外堀の姿

外堀は、船場川と平行するように設けられ、堀の東西両面は石垣でした。堀の規模は、幅約10m、深さ約1.7～2.6m、調査区全体では、南北延長約30mにわたって確認しました。今回の現地説明会では調査区南部をご覧いただきます。

堀の東面石垣は、高さ約1.7m、7段分の石積みが、西面石垣は、高さ約2.6m、9段分が残っていました。堀底は、東から西に向かって緩やかに傾斜しており、石垣最下段の比高差は約0.6mあります。

東面石垣は、石垣を構成する築石に、40～60cm大の自然石や粗加工された割石が多用され、そのほとんどに凝灰岩を用いていました。根石を含めた石垣の下部では、築石の面がほぼ横向に並び横目地が通る傾向がみられます。その一方で、石垣上部では、あまり目地が通らず積み方に乱れが目立つ箇所が多いことから、広い範囲で石垣の積み直しが行われたと考えられます。

石垣の背面構造である裏込めには、拳大の河原石のほか、人頭大や築石と変わらない大きさの割石も含まれていました。また裏込めの堆積単位が異なることなどからも、石垣上部で広範囲の積み直しが行われたことがわかります。東面石垣は、築城以前にあった自然流路の川岸部分を利用して石垣を構築したと考えられます。

西面石垣は、裏込めに築石と同程度の大型の石材がより多く使われている点を除けば、東面と同じ状況です。また西面石垣は、自然地形をあまり加工することなく築かれており、洪水等で崩落した石垣を急いで復旧するために、元々使われていた築石などをそのまま裏込めに取り込んで石垣を積み直したのではないかと考えられます。

江戸時代、城下の水害記録は多数ありますが、特に大きなものとして、酒井家が入封した寛延2（1749）年7月3日の大洪水があります。死者400名を越える未曾有のもので、その被災状況は、絵図に詳しく描かれています（表紙）。調査で見つかった石垣の様子から、これらの災害に対応した当時の人々の様子が伝わってきます。

## まとめ

今回の調査成果から、姫路城では、船場川を利用して、城の嚴重な防衛と治水・利水の機能を兼備させるという、巧みな築城が行われたことが明らかになりました。

この付近の外堀の整備時期については、石垣下部の様子から姫路城築城段階の江戸時代初頭に遡る可能性も考えられます。平成29年に行った備前門跡の発掘調査でも、江戸時代初期の特徴を示す石垣を確認しています。外曲輪南西部では、江戸時代の早い時期に整備が完了していたと考えられます。